

瓦斯十題



ガスと暮らしのいい関係を提案した広告『瓦斯十題』は、日本初のグラフ誌『風俗画報』(1913・大正2年4月号)に掲載。

大正 最先端の暮らしを創造したガス

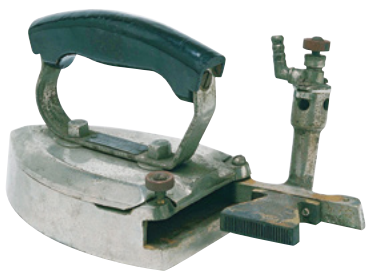
デモクラシーやモダニズムが花開いた大正時代、都市部に暮らす庶民の生活は徐々に豊かになりました。モダンな暮らし

しを求める声に呼応するかのよう、台所から始まったガスの熱利用もさまざまなシーンに広がっていきます。左の『瓦斯十題』は、そんな時代の息吹が感じられる広告です。真ん中の「瓦斯ストーブ 娘は猫を抱かぬなり」と謳われている娘さんは、初めて体感するガスの優しい温もりにさぞ驚いたことでしょう。それまでは寒くなる腕の中で湯たんぽ代わりに

されていた猫も、ガスストーブの登場に大喜びのようです。ほかに炭で衣類を汚す心配のないガスアイロン、煙突掃除の手間がなく安定した火力で沸かせるガス風呂釜、呼吸器系の炎症治療に活躍するガス吸入器など、暮らしを快適・便利に変えるガス機器の素晴らしさが高らかに謳われています。町工場の主人が喜んだであろう、ガスエンジンやガスバーナーも登場しています。

に通じるものがあります。大正時代はガス事業の礎が築かれた時期でした。明治末期に全国で10社程度だったガス事業者は大正4年には90社を超え、現在も活躍するガス機器メーカーの何社かが産声を上げています。1925(大正14)年には最初の瓦斯事業法が施行され、都市ガスは私たちの暮らしを支える基幹インフラへと成長を遂げていきます。

ユーモアのセンスたっぷりの宣伝コピーには思わず笑みがこぼれますが、いずれもモノ(機器)の紹介でなくコト(ライフスタイル)の提案になっているのは注目に値します。お客さまの暮らしに少しでも役立つとうと知恵を絞り、市場を開拓するガス業界の取り組みは、昔も今もそれほど変わらないことがうかがい知れます。またガス灯と電灯が激しく競争する中「ソレ神田火事だで電気闇となり」「雷が鳴れば電気は休みなり」と、停電時のガスの有用性をPRしているあたりも現代



ガスアイロン。それまでの炭火アイロンから格段に作業性が向上。



菊型ストーブ兼用コンロ。そのままでは卓上コンロとして、専用の部品を載せればストーブとして使用できる。